

スペインの前衛詩運動の始まり

— ビセンテ・ウイドブロ 『北極の詩』

鼓 宗

Poemas árticos de Vicente Huidobro and the beginning of the Spanish Avant-garde Poetic Movement

TSUZUMI Shu

Poemas árticos of Vicente Huidobro is one of the most influential works in the evolution of avant-garde poetry in Spain and Hispanic American countries, especially the former post-1918, when the Chilean poet visited its capital, frequented ‘tertulias’ of the leading literary figures of the time, such as Cansinos-Assens and Ramón Gomez de la Serna and kept an apartment in Madrid. At the same time, Huidobro’s own poetry enjoyed considerable success among young Spanish poets such as Gerardo Diego and Juan Larrea, encouraging them to compose poems based on the new esthetics, which were mainly elaborated by Parisian artists, but also reflected in Huidobro’s own poetics of Creationism. Guillermo de Torre, future critic of avant-garde literature and founder of the Ultraísmo, the principal avant-garde movement in Spanish literature, is a case in point. In this brief article, we cite the testimony of scholars such as René de Costa and Cedmil Goic, as well as the above-mentioned writers and poets, concerning Huidobro’s stay in Madrid and the publication of his book and in light of this evidence, propose a reevaluation of creationist poetry.

キーワード：ビセンテ・ウイドブロ (Vicente Huidobro)、クレアシオニスム (Créationnisme)、
『北極の詩』 (*Poemas árticos*)、スペイン語詩 (Spanish language poetry)、
チリ文学 (Chilean literature)、前衛詩 (Avant-garde poetics)

はじめに

いまなお一次世界大戦が終結していない1918年7月、ピセンテ・ウイドプロは妻と子供たちを連れて、戦火と無縁であったマドリッドに到着した。チリの詩人はすでに1916年の暮れにパリに居を定めており、この光の都でピエール・ルヴェルディやマックス・ジャコブといった詩人たちに伍して新しい美学の探究の一端を担った。北部戦線で重傷を負って復員してきたギョーム・アポリネールをたびたび自宅に招くなど、^{エスプリ・ヌーヴォー}新精神の芸術が隆盛していくのを目の当たりにしてきた。そのパリを離れることは必ずしも本意ではなかったであらうが、トゥール近くの町ボーリウ・プレ・ロッシュで過ごしたしばらくの避難生活の後、スペインの首都にたどり着いたのである。

しかし、このヨーロッパ全体の状況が強いたスペイン来訪は、スペインの若い詩人たちのあいだに決定的な変化の種をまくこととなった。この時のウイドプロのマドリッドでの滞在は、同年11月までとそれほど長い期間にわたらないにもかかわらず、その間に4冊の詩集を出版している¹⁾。『エッフェル塔』*Tour Eiffel* (Madrid, Pueyo, 1918)、『アラリ、戦争の詩』*Halliali, poème de guerre* (Madrid, Jesús López, 1918) の2冊はフランス語で、『赤道』*Ecuatorial* (Madrid, Pueyo, 1918)、そして本稿の主題として取り上げる『北極の詩』*Poemas árticos* (Madrid, Pueyo, 1918) はスペイン語で発表された。これらの詩集は、前年にパリで出版された詩集『四角い地平線』*Horizon carré* (Paris, Paul Birault, 1917) の延長線上にあり、かの地で様々な詩人たちがそれぞれに探求していた新しい道をやはり歩もうとするものであった。しかしながら、これらの詩集のいずれもが少数の発行であり、内容は実験性に富む先鋭的なものであったため、それを読む機会を得た読者は少数に限られた。けれどもこれらの詩集のうち、ことに『赤道』と『北極の詩』の2冊は、前者はこの時期のウイドプロの詩の際立った特徴である同時主義的な表現が、大戦という当時の人々にとって至近の主題によってよく表れているという点において、また後者はスペインのほとんどの読者にとって未知であった新しい詩法に触れるのに最適であったという点において、その後のスペイン語詩の発展にとってよりいっそう深い意義を持った。

そして、これらマドリッドで出された4冊の詩集には、ウイドプロがすでに最初の渡欧時に着想を抱いており、1916年以降の作品によく投影されつつあったその詩学——クレアシオニスム、その実態は詩人の深化に連れて変遷するが——がよく反映されている。なかでも『北極の

1) 加えて、やはりこの年に『水鏡』*Espejo de agua* (Buenos Aires, Biblioteca Orión, 1916) の再版となる二種の版を出している。

詩』は、スペインの詩人たちが、そこに展開されるクレアシオニスムの詩を通じてフランスで発展していた前衛主義の潮流を身近に知るきっかけとなった。

本稿では、この詩集をめぐる直接的に、あるいは俯瞰的になされた諸々の言説を取り上げて、『北極の詩』がスペイン語詩の発展において果たした役割の重要性を明らかにしたい。

1 『北極の詩』をめぐる評価

オクタビオ・パスはロマン主義から前衛主義に至る詩についての広範な考察である『泥の子供たち』において、スペイン語詩の発展の過程でウイドブロが果たした役割を次のように述べている。

Como en 1885, el iniciador fue un hispanoamericano: a fines de 1916 el joven poeta chileno Vicente Huidobro llega a París y poco después, en 1918 y en Madrid, publica *Ecuatorial* y *Poemas árticos*. Con esos libros comienza la vanguardia en castellano. Huidobro fue adorado y vilipendiado. Su poesía y sus ideas prendieron en muchos jóvenes y dos movimientos nacieron de su ejemplo, el <<ultraísmo>> español y el argentino -ambos rechazados airadamente por el poeta como imitaciones de su creacionismo.²⁾

このようにパスは、『北極の詩』、そして『赤道』によってスペイン語の前衛主義がはじまったと位置付けている。そして、これと同様の見解をウイドブロについての複数のモノグラフが提供している³⁾。

一例を挙げると、『北極の詩』の詩的言語を構造的に分析した最初期の試みとなったその著作⁴⁾で、ジョージ・ユーデイスがこの詩集の重要性を指摘している。それによれば、ウイドブロは技法上の新機軸を用いながらも唯美主義に陥ることなく『四角い地平線』を完成したが、そこから、そしてさらには『赤道』、『エッフェル塔』、『アラリ』からも最良のものを集成した作

2) 引用箇所は初版にはなく、増補版での加筆である。Paz, Octavio, *Obras completas I: La casa de la presencia*, edición de autor, Barcelona, Galaxia Gutenberg / Círculo de Lectores, 1999, pp. 559-560.

3) ただし、パスは最終的にウイドブロの最大の功績を『アルタソル』に帰しており、ある時期まで大勢の見方もそうであった。例えば、サウル・ユルキエビチは『アルタソル』はむろん、サンティアゴ・デ・チレでの初期の時代からカルタヘナにおける最晩年までのウイドブロの作品を広範に分析していながら (Yurkevich, Saul, *Fundadores de la nueva poesía latinoamericana: Vallejo Huidobro Borges Gironde Neruda Paz*, Barcelona, Barral, 1971, pp. 53-115)、『北極の詩』についてはその出版の事実に触れているに過ぎない。

4) Yúdice, George, *Vicente Huidobro y la motivación del lenguaje*, Buenos Aires, Galerna, 1978.

品である。そう前置きした上で、『北極の詩』が、構造的な観点においてだが、もっとも完成した作品であると断定している⁵⁾。

一方、より年が下ったものを引くなら、例えば、オスカル・アンが2008年に編んだアンソロジーに載せた 'Del génesis al apocalipsis' と題する序文がある。そこでアンは、1916年までにチリで出たものだが、新しい詩を求める姿勢を示しながらも従来の詩的言語を用いて書かれた5冊の詩集をこの選集から除くこと、ウイドブロが『水鏡』で新しい境地を開いた後、国際語であるとみなしたフランス語でそれを発展させようと努めたこと、しかし、このフランス語使用をやがて放棄するに至ったことを述べた上で、『北極の詩』と『赤道』とが当時のスペインにおいて持った意味を次のように示している。

Muy importante es el año 1918, cuando ven la luz en Madrid, casi al mismo tiempo, el poema largo *Ecuatorial* y la serie de textos breves titulada *Poemas árticos*. Estos son libros inaugurales de la Vanguardia. Incluyen todas las audacias tipográficas que la nueva estética patrocina: exclusión de signos de puntuación, aprovechamiento creativo de los espacios en blanco, versos en mayúsculas; pero a diferencia de los caligramas del año 1913, tanto la composición de los textos como su lenguaje son completamente revolucionarios para esa hora. Tan conscientes están los españoles de la importancia del paso de Huidobro por Madrid y de su influencia en la joven poesía, particularmente en la gestación del movimiento llamado <<Ultraísmo>>, que llegan a equiparar su visita con el impacto que produjo la llegada de Rubén Darío a Madrid en los años del Modernismo.⁶⁾

ウイドブロのマドリード訪問をダリーオのそれになぞらえるなど、アンの見解もパスのそれと似通うが、後者の抽象的な言い方に比べて、「当時として」という保留を付けてではあるが、ここに取り上げた2冊の詩集の革命的な性質により強い具体性をもって言及している。そして次の段落では、1918年のスペイン語による2冊のうち『赤道』に焦点を当てて、現代の読者にとってその革新性が無効になったとしても、歴史的意識に照らせば、その美学上の価値がなお衝撃を与えること、さらに、この詩集が前衛主義の詩の始まりを告げる里程標であり、「『赤道』

5) Ibid. p. 66. 'Los ensayos y experimentos de esta etapa culminan en *Poemas árticos*, su obra más acabada desde el punto de vista estructural.'

6) Huidobro, Vicente, *Vicente Huidobro: El pasajero de su destino*, selección y prólogo de Óscar Hahn, Sevilla, Sibilina, 2008, pp. 6-7.

以前」と『赤道』以降』というスペイン語詩の見方は、今日になってようやく可能になったのだと述べる。ここでアンは、長詩である『赤道』を重んじている⁷⁾。しかし、ほぼ同じことが、『北極の詩』についても言えるだろう。

同種の見解を複数の研究者が共有している。例えば、ホセ・ルイス・フェルナンデス・ペレスが編んだウイドブロとファン・エマルの選集の解題にも、'Poemas árticos, libro a partir de cual emergieron varios seguidores del creacionismo en España' という一節が見つかる⁸⁾。ウイドブロがスペインに前衛主義の風を吹き込んだことは間違いないのだが、このように、それはとりわけ『北極の詩』をもってなされたという見解が支持されている。

2 同時代の証言者たち

詩人のヨーロッパにおける活動と同時代の証言者を求めるなら、1918年のマドリード来訪に際してもっとも好意的にウイドブロを迎えたラファエル・カンシノス・アセンスの名前が常に筆頭に挙がる。マドリードのカフェ・コロニアで、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナのそれに比肩する重要なテルトゥリアの主人を務めたこの人物は、詩人や作家であるよりもまずすぐれた批評家であったが、ウイドブロがマドリードに携えてきた『四角い地平線』に何よりも高い評価を与えている。

スペインでの滞在を終えてウイドブロがチリへと一時帰国した後の1919年、カンシノス・アセンスは『四角い地平線』とマドリードで出版されたスペイン語による2冊の詩集を論評する記事を「コスモポリス」誌に寄せた⁹⁾。そこで、フランスで出た詩集を、それがまさに始まりを示す極端な類型でありながら、それゆえにもっとも機知に富み豊かな多様性を誇っていると述べ、そして『赤道』については、もっとも完成されていて、もっとも自己完結的で純粋な詩であると評した上で、『北極の詩』には次のような評価を与えている。

Poemas árticos es una alegoría de la guerra en las ciudades, con muchos instantes puramente simbólicos y algunas visiones trazadas al estilo de las aguafuertes de los

7) アンは1978年にサンティアゴ・デ・チレで、この詩集の第二版 (Huidobro, Vicente, *Ecuatorial*, Santiago de Chile, Nascimento, 1978) の刊行に携わった。

8) Fernández Pérez, José Luis, 'Estudio de vanguardia en Chile' en Huidobro, Vicente, Emar, Juan, *Vanguardia en Chile*, selección y estudio por José Luis Fernández Pérez, Santiago de Chile, Santillana, 1998, p. 213.

9) 'La nueva lírica ("Horizon carré", "Poemas árticos", "Ecuatorial")' (Cosmópolis I, 5 de mayo de 1919) en Costa, René de (ed.), *Vicente Huidobro y el creacionismo*, Madrid, Taurus, 1975, pp. 272-273.

impresionantes; tales las imágenes de ese cortejo de reyes que van al destierro, ornados con collares de lámparas extintas — ¿no podría haber dicho eso Hugo? Y de esos hombres <<pegados a las paredes como anuncios>>; tal ese símbolo de quien <<vio pasar todos ríos bajo sus brazos>>.

まずウイドブロの詩集を、印象派のエッチングに比しているのが目を引く。『北極の詩』を「都市における戦争のアレゴリー」と呼びながらカンシノス・アセンスが引くのは、火の消えたランプの首飾りを身に付けて放逐される諸王たちの随行団や、腕の下を流れる川など、なぜか『赤道』に現れるそれである。しかし、それは評者の指摘の通り、確かにユゴの時代には誰も言えなかったであろうイメージであるのだが、なおキュビスムの詩派を知らずにいたのだろうか、ここで引き合いに出されるのが、マラルメでもなければヴァレリーでもなくロマン主義の巨人であることが、当時のスペイン詩壇の置かれた状況を物語るように思われる。

『コスモポリス』誌の記事の一个月後に『エル・リベラル』紙に同じ書き手が寄せた記事¹⁰⁾では、古い価値観に縛られる多数の者たちがフランスから最新の文学に関する知見をもたらした恩人を冷たく遇したと難じた上で、ウイドブロがスペインの若い詩人たちに与えた刺激がもたらすはずの変化について次のように記している。

Huidobro nos traía primicias completamente nuevas, nombres nuevos, obras nuevas; un ultra-novecentismo. Desdeñando a los doctores del templo, el autor de *Horizon carré* se limitó a difundir la buena nueva entre los pocos y los más jóvenes, en paseos y reuniones sedentes, de un encanto platónico, en que la novísima tendencia lograba la fijación de sus matices. De esos coloquios familiares, una virtud de renovación trascendió a nuestra lírica; y un día, quizá no lejano, muchos matices nuevos de libros futuros habrán de referirse a las exhortaciones apostólicas de Huidobro, que trajo el verbo nuevo.¹¹⁾

ここでウイドブロの言葉は使徒のそれにたとえられているが、『四角い地平線』の著者が象牙の塔にこもる学識者たちを軽蔑する一方で、ごく少数の、ごく若い詩人ただけに自らの知る新しい傾向を伝えようとしたこと、そして、それはこの時点でスペイン文学の最新の潮流であ

10) Cansinos-Assens, Rafael, 'Un gran poeta chileno: Vicente Huidobro y el creacionismo' ('El liberal', 30 de junio de 1920) en Costa (1975), pp. 119-124.

11) Ibid., p. 120.

ったノベセンティスモ、すなわち、千九百年代主義もしくは二十世紀主義を乗り越えて、詩の刷新をもたらすであろうことが指摘されている。続けてカンシノス・アセンスは、『四角い地平線』で示された傾向が、先のマドリードで印刷された4冊の詩集にも受け継がれており、それらの作品でもってウイドブロの新しい美学の実際的な模範という恩恵が与えられた旨を語っている。

Vicente Huidobro, que ya había publicado en París su *Horizon carré*, publicó en esta corte cuatro libros más: *Ecuatorial*, *Poemas árticos*, *Hallali*, *Tour Eiffel*, libros diminutos de una blanca anchura de márgenes. Con ellos brindaba paradigmas prácticos de su concepción estética, doctrinalmente desarrollada en conferencias leídas ante el público apasionado y curioso en París.¹²⁾

これらの言葉から、ウイドブロが新しい詩の境地を切り開いたのが、ほかのどの作品よりも『四角い地平線』によってであると捉えていながら——記事ではウイドブロを指して、『四角い地平線』の作者という呼び方を一度ならず用いている——、それをスペインに伝播する役目を負ったのは『赤道』や『北極の詩』であるとカンシノス・アセンスが考えていたことがうかがえる。

ギリェルモ・デ・トーレは、そのカンシノス・アセンスとともにスペインの最初の前衛主義であるウルトラリスモの創生に理論家として深く関与したが、やはりウイドブロとの接触によって未知の世界へと誘われた一人である。しかしながら、1919年以降、クレアシオニスムの創始の帰属をめぐる見解、あるいはウルトラリスモのクレアシオニスムとの関係が原因で仲をたがえていた。そうした経緯にもかかわらず、ウイドブロがすでに世を去って十余年が経過した1962年、アルゼンチンの『フィクション』誌に寄せた記事で¹³⁾、かつて若者であった著者の個人的な体験を肯定的なものとして語っている。トーレもまた、カンシノス・アセンスと同様に、まずは『四角い地平線』の重要性を見出している。

Me refiero a la época en que yo, aprendiz de escritor, ávido según he dicho de las más audaces novedades, conocí al poeta chileno que portador de ellas, pasó el otoño de 1918 en

12) Ibid.

13) 'La polémica del creacionismo: Huidobro y Reverdy' (Ficción, 35-37, enero-junio de 1962) en Costa, René de. (1975), pp. 151-165.

Madrid. En las páginas del libro ya mencionado [*Horizon carré*] en torno a Apollinaire y el cubismo, he recordado algunos rasgos: el modo afectuoso como supo reunir a su alrededor, en un departamento amueblado de la Plaza de Oriente madrileña frente a los jardines del Palacio Real, a un grupo de jóvenes escritores, muy diversos en valor como suele acontecer, en todo instante germinal, pero parejamente sensibles para citar cosas; a ellos se agregaban varios artistas extranjeros que la guerra había desplazado hacia la España en paz, como algunos polacos Marjan Paszkiewicz y Vladimyslaw Jahl, y los esposos Sonia y Robert Delaunay.¹⁴⁾

引用の後半では、オリエンテ広場の詩人の居宅に、ポーランド人の二人の画家ウラジスラフ・ジャールとマリヤン・パシュケヴィチ、それにソニアとロベールのドロネー夫妻が出入りしていたと明かされているが、自身は同じ場所で、アポリネールの『アルコール』やジャコブの『骰子筒』、あるいはルヴェルディの『楕円の天窓』などを手にする機会を得たと回想している。その後、直前に「もっとも表現力にあふれた著作」¹⁵⁾と評した『四角い地平線』に加えて、マドリードで発行された4冊の詩集に触れて、トーレは次のように記す。

Por mi parte, y la de otros de mi edad — agrupados en las sucesivas y efímeras revistas de ultraísmo — aquellos libros de poemas tan ingenuos de aspecto como complejos de intenciones fueron leídos y propagados con simpatía y admiración.¹⁶⁾

ここでトーレは、自分ばかりでなく、短命だが、この訪問に触発されて発行されるウルトライスマの雑誌にやがて集うことになる同世代の者たちが皆、感嘆をもってウイドブロの詩集を迎えたと明かしている¹⁷⁾。1918年12月にウイドブロのもとに届いたトーレの手紙は、こうした若い詩人たちの熱狂を裏付けている。

14) Ibid., p. 156.

15) Ibid. 'el más expresivo suyo'.

16) Ibid., p. 157.

17) トーレは続けて、当時の記事のなかでチリの詩人のそれといっしょにフランスの前衛の詩人たちの名前を引いたので、その怒りを招くことになったと、いずれ持ち上がるクレアシオニスムの先唱権をめぐる論争のいきさつを述べている。そこから生じた不和が、ウイドブロがマドリードに残した足跡の評価が遅れる要因の一つとなったことが想像できる。

Y hoy que portamos anclados en nuestro <<yo>> los frutecidos motivos germinales de sus directrices *Poemas árticos*, de su cósmico *Ecuatorial* y de su motiva *Tour Eiffel*, junto con las irradiaciones de afines espíritus galos con quienes usted nos hizo intimar y a los que vamos desglosando pausadamente — ¡oh esa mi Elegía estelar a la reciente muerte de Guillame Apollinaire que han rechazado honrosamente varias Revistas! — somos ya aguerridos a lanzar en un gesto de manga propulsión superatriz algunos Poemas creacionistas y deveniristas, dinonysiacamente posesos.¹⁸⁾

トーレは『赤道』を「宇宙的な」と呼び、『エッフェル塔』を「突き動かすような」と形容している。『北極の詩』には「指針となる」という言葉を与えてるが、これら三冊の詩集について、豊かな成果をもたらすものだが、萌芽となるべきその動機を自分たちの〈自我〉にしっかりと留めていると、ウイドブロに熱意を込めて伝えている。そして、彼らスペインの若い詩人たちが、それらの詩集を通して、フランスの新しい詩を開拓しようという精神を受け止めようとしていること、それはいまだ親しいものになっておらず、時間をかけて吸収していく必要があったことが了解される。

さらに興味深いのは、トーレのみならず複数の若者たちが、クレアシオニスム、もしくは「デベニリスモ生成主義」の詩を世に送ろうとしていると高揚した調子で語っていることである。トーレがこの後、ウルトラリスモにおいて理論家として指導的な立場に身を置き、クレアシオニスムには一貫して批判的な態度をとったことは周知のとおりだが、この時期のウイドブロへの傾倒ぶりは、「ディオニソスのごとく（熱狂的に）憑りつかれた」という表現からも明らかである。心酔した相手である詩人当人に向けた書状であるから誇大な物言いになったというよりも、そうであるからこそ、むしろ率直な自分たちの心情を打ち明けたのではないだろうか。いずれにしても、『北極の詩』を「指針となる」という形容詞を用いて熱賛するこの書簡は、トーレのみならずスペインの若い詩人たちが抱いたであろう、ウイドブロがパリから携えてきた新しい詩の精神を自分たちの糧とし、それを確実に反映した詩を具現化したいという意欲をよく伝えている。

マドリードで出版された『赤道』や『北極の詩』は私家版のようなものであったから、少数が流通したに過ぎない。オリジナルがフランス語で出版された『アラリ』と『エッフェル塔』は、1919年の8月と9月にウルトラリスモの機関誌となっていた『セルバンテス』Cervantes 誌

18) Huidobro, Vicente, *Epistolario: Correspondencia con Gerardo Diego, Juan Larrea y Guillermo de Torre 1918-1947*, edición de Gabriele Morelli con la colaboración de Carlos García, Madrid, Residencia de Estudiantes, 2008, p. 4.

にスペイン語訳が載るが、『北極の詩』についてはサンティアゴ・デ・チレのNascimento社による1978年の第2版まで再版されることはなかった¹⁹⁾。1920年に4編の詩編のフランス語訳が雑誌に掲載されたものの、ウイドブロの全集が出るのが1964年と1976年²⁰⁾であり、1978年の版を用意したのと同じウゴ・モンテスが編んだ選集に収録されたのも1957年であるから²¹⁾、スペインの読者は発行部数がさして多くなかったはずのこの詩集を何らかのかたちで入手し、それを読んだことになる。

そのような『北極の詩』が若い詩人たちのあいだに広まっていく過程をよく伝えるのが、ヘラルド・ディエーゴと、ファン・ラレーア——スペインにおいてもっとも忠実にクレアシオニスムの理論の実践に努め、やがて、その先へと進んでいった詩人たち——の場合である。ディエーゴは〈27年の世代〉を代表するひとりであり、ミゲル・デ・ウナムノやマチャード兄弟、あるいは、ファン・ラモン・ヒメネスといった評価の確立した詩人たちのみならず、ピセンテ・アレイクサンドレヤルイス・セルヌダら、そのグループに属することになる詩人たちをいち早く収載した重要なアンソロジー、『スペイン現代詩集』²²⁾を編纂した。一方、ラレーアは、時として同じグループに含められながら生前はごくわずかの機会にしか作品を公刊しなかった。

ディエーゴとラレーアは二人とも、その知己を得る以前にウイドブロの詩集を入手していない。1920年代になると『イメージ』*Imagen* (1922) や『泡の手引き』*Manual de espuma* (1924) などの詩集を出すことになるのだが、この時にはそのような未来を知らない前者が、教職に就く試験の準備のためにマドリッドに立ち寄った際、後に『セルバンテス』の寄稿者の一人となるエウヘニオ・モンテスから、新しい文学の潮流が生まれつつあることを知らされ、借り受けた手書きの『北極の詩』から三編の詩編を筆写する²³⁾。そして、ラレーアは、友人がそうして手に入れた写しのおかげでウイドブロの詩と接点を持った。後年の回想になるが、ディエーゴは、ウイドブロの詩学のスペイン語詩への恩恵は、自らの詩ではなく、何よりもラレーアの詩を通

19) Huidobro, Vicente, *Obra poética*, edición crítica, Cedomil Goic, coordinador, Barcelona, La Habana, Lisboa, París, México, Buenos Aires, São Paulo, Lima, Guatemala, San José, Caracas, ALLCA XX, 2003, p. 526, 597 y 611.

20) Huidobro, Vicente, *Obras completas*, prólogo de Braulio Arenas, Santiago de Chile, ZigZag, 1964および Huidobro, Vicente, *Obras completas*, prólogo de Hugo Montes, Santiago de Chile, Andrés Bello, 1976 の 2 種類の全集が刊行された。

21) Huidobro, Vicente, *Obras poéticas selectas*, selección y prólogo de Hugo Montes, traducción de las obras de José Manuel Zañartu Santiago de Chile, Editorial del Pacífico, 1957.

22) Diego, Gerardo (ed.), *Poesía contemporánea española (1915-1931)*, Madrid, Signo, 1932.

23) Morelli, Gabriele, 'Vicente Huidobro, demiurgo y cantor del verso nuevo', en Huidobro, Vicente, *Poesía y creación*, selección y prólogo de Gabriele Morelli, Madrid, Fundación Banco Santander, 2012, p. XXXVII

じてもたらされたのだと強調している。

“Entre nosotros, si la madurez de Cansinos-Assens pudo encontrar en su trato un estímulo [sic] estético, y si la adolescencia de Eugenio Montes le debe mucho, la plenitud de nuestro profundo Juan Larrea le declara mentor y guía esclarecido. Directamente o a través de Larrea o de algún otro discípulo directo, algo de lo mejor de Fernando de Villarón, de Rafael Alberti, de Pablo Neruda, de Leopoldo Marechal, de Federico García Lorca, de otros poetas de lengua española y de otras lengua [sic] procede de fuente huidobriana.”²⁴⁾

自身や友人のラレーアばかりではない、ラファエル・アルバルティやフェデリコ・ガルシア・ロルカ、あるいはパブロ・ネルーダといったスペイン語圏の詩人たちの多くが、その最良の部分のいくばくかを何らかのかたちでウイドブロに負っている、とデイエーゴは指摘している。

他方、前出のトーレヤカンシノス・アセンスが、『四角い地平線』を当時のウイドブロのもっともすぐれた創作とみなしたのに対して、その詩集が日の目を見るのに不可欠な助力を与えたファン・グリスは、1918年10月の半ばにボーリウ・プレ・ロッシュからマドリード滞在中の友人に書き送った手紙で、この画家に固有のガリシズムを交えながら、『北極の詩』について次のような賛辞を送っている。

Sobre tus libros debo lo primero decirte el gran placer que me ha causado tu dedicatoria y enseguida la gran emoción poética que he tenido leyéndolos, sobre todo los *Poemas Árticos* [sic.]. De ello se *dégage* [sic] algo que no existe por ejemplo en el libro de Juan Ramón que me enviaste. El lirismo y la poesía que es tan raro encontrar y que es lo que único que me interesa.

Y ahora como soy tu amigo y como repetidas veces me lo has pedido paso a hacerte la crítica de ellos. *Poemas árticos* yo lo considero superior a *Ecuatorial* o por lo menos lo comprendo mejor por ser más familiar. El otro es para mí demasiado grandioso y no he llegado aún bien a penetrarlo. Los dos son seguramente mejores que *Horizon carré*, pero...²⁵⁾

24) Diego, Gerardo, ‘Vicente Huidobro’ (‘Athena’, 295-296, enero-febrero, 1950), Chile, en Morelli, Gabriele (ed.), *Treinta años de vanguardia española*, Sevilla, El Carro de la Nieve, 1991, p. 106.

25) Gris, Juan, *Correspondencia y escritos*, edición crítica de María Dolores Jiménez-Blanco, Barcelona, Acanalado, 2008, p. 226-227. 引用末尾の省略の手前に「しかし」と接続詞が置かれているのは、これらの詩

『赤道』がパブロ・ピカソに捧げられていたのに対して、『北極の詩』が献じられた相手はこのグリスト、もう一人パリで活躍していたリトアニア出身のジャック・リップシッツである。二人の芸術家とその家族は、先述のとおり戦火を避けて避難したボーリウにおいて、ウイドブロ一家との親交を深めていた。その事実を、詩集の冒頭に置かれたものだが、'A Juan Gris y Jacques Lipchitz, recordando nuestras charlas vesperales, en aquel rincón de Francia' という献辞が示している。しかし、『赤道』でピカソに表された敬意と同様に、この二人の友人に向けられた友情も、人としての好悪の感情を超えた、その芸術に対する共感と崇敬の念の表れと受け止めることができよう。というのも、『赤道』においても『北極の詩』においても、この時期のクレアシオニスムの創造は、これらの造形芸術家たちが追い求めた傾向、すなわちキュビスムの文学における探求という側面が強かったからである。

それは一面、絵画的でありながら、ピカソらが造形芸術で追い求めたものがそうであるのと同様に、むろん単なる風景の描出ではない。クレアシオニスムの詩の示すものだが、平面性、垂直性、幾何学性、あるいは運動といった様々なキュビスムの性質については、スサーナ・ベンコ²⁶⁾の本格的にそれを論じた労作や、ユーディスの前掲書の補遺に詳しい。後者はその論を次のように結んでいる。

Huidobro, en *Poemas árticos*, comprende ambos aspectos: explota la convencionalidad de vieja poesía como hacen Apollinaire y Jacob, introduce una verosimilitud contraria (la del mundo futurista y simultaneísta de Cendrars y otros, lo cual no se encuentra en la obra de Reverdy), y por fin, integra los elementos de estos códigos convencionales y culturales en un sistema estructural (el desplazamiento sémico) que ofrece otro tipo de motivación (metonímica). Desde esta perspectiva el lenguaje poético de Huidobro se aproxima más al cubismo, especialmente el cubismo sintético de Gris, puesto que en su obra operan los mismos factores que se observan en los cuadros del pintor cubista. Huidobro no dejó escritos teóricos acerca de su nuevo sistema de construcción, de estructuración poética; los poemas de su etapa creacionista (*Poemas árticos*, en particular), sin embargo, son en

集に見られるイメージの過度の渴望が、詩それ自体や真に感情を揺さぶることが可能なイメージから力を奪うものと批評する許しを求めるため。例えば、'Cantar de Cantates' のなかの 'La nubes hidrófilas' という表現がやり玉に挙げられている。ここに引用したのは書簡だが、『四角い地平線』の執筆の際にはおそらく、二人でひざを突き合わせてこのようなやり取りを重ねたのであろう。

26) Benco, Susana, *Vicente Huidobro y el cubismo*, Caracas, Monte Ávila, 1991.

realidad una práctica analítica del lenguaje que hace patente original de la construcción de sistemas, sirve de modelo de la actividad creadora que proponía.²⁷⁾

ユーディスによれば、『北極の詩』においてウイドブロの詩的言語は、キュビズムに、ことにグリスの総合的キュビズムに接近する。それはアポリネールやジャコブが試みたように、因習的な詩に現れる諸要素を解体する一方、ルヴェルディの作品におけるように、明快な構成の中に、直示するごとくそれらの要素が持つ意味が文脈に基づいて異なって提示される。そして、いくつかの要素が繰り返し提示される。解体と再構成という点において、『北極の詩』に収められた詩篇はグリスの絵画にきわめて近似するのである。

まとめ

『北極の詩』が、上の引用でユーディスが示す通りの性質を持つとして、ウイドブロはこの詩集を通じてスペインの若い詩人たちのあいだに何を残したのだろうか。その答えを得るため、もう一度——今度はチリの詩人を追悼して書かれた記事からだが——ディエーゴの言葉に拠る。

la [visita] de 1918, ya con el creacionismo flamante, y *Ecuatorial* y los *Poemas árticos* en la imprenta, fue la decisiva. Pocos meses después, y como consecuencia, nacía el ultraísmo y se armaba en España la que armó. Polémicas, conferencias, revistas, libros, artículos, manifiestos exposiciones, a todo acudía Huidobro con admirable constancia en la explicación y defensa de su credo. En España no se le comprendió muy bien, y de ello pueden dar fe los escritos en que se daba cuenta de su obra, por no hablar ya de las necedades que, tomando por las hojas el rábano de la poesía, emitían en tertulias, redacciones y domicilios ciertos santones del poema y del artículo crítico.²⁸⁾

ここには1916年12月の短いマドリード訪問に触れた先立つ部分を前略したが、ディエーゴはこの記事で、他の多くの証言と同じように、1918年のウイドブロによる二度目の同地への滞在の結果として、ウルトライスマが誕生したと語っている。ただし、ディエーゴは、当時、ウイドブロの詩に容易に見つかる新奇さはともかく、それが示す理念はよく理解されなかったとも

27) Yúdice, George (1978), p. 300.

28) Diego, Gerardo, 'Vicente Huidobro (1893-1948)' ('Revista de Indias', VII, 33-34, Julio-diciembre, 1948 en Costa, Réne de (1975), pp. 21-22.

言っている。さらに、クレアシオニスムが非妥協的であり、孤高であるがゆえに挫折したと、そして、それは晩年のウイドブロ自身がおそらく認めていただろうと指摘する²⁹⁾。確かに、ディエゴのようにウイドブロを師であり友人であると自認し³⁰⁾、またその詩法に則って作品を書こうとした詩人たちが少なからず存在したにもかかわらず、クレアシオニスムは本質的に非党派的で、ダダやシュルレアリスムのようにグループを形成することはなかった。

一方、ウイドブロがその誕生の契機をもたらしながら指導者の立場に立つことはなかったウルトラリスモは、いく人かのすぐれた詩人が一時期その道を通りはしたけれども、それを代表すべき豊かな才能に必ずしも恵まれなかったこと、ことに前衛主義の文学は危険分子とみなされ目の敵にされたように、スペイン内戦後のフランコ体制下における多くの文学者たちへの抑圧のような逆風が吹いたことなどが理由で、グロリア・ビデーロの述作のような例外はあるにしても³¹⁾、基本的には20世紀末になって再評価の兆しが表れるまでほとんど忘却されていた。

繰り返すが、『北極の詩』はスペインの若い詩人たちにとって、それまでの常識を覆す激しい衝撃であった。それは、すぐさまウルトラリスモという反響を呼んだ。1818年の秋の終わる頃には、この新しい文芸思潮の最初の宣言がマドリードの新聞紙上で公にされた³²⁾。この時、ウルトラリスモたちの誰もがウイドブロの新しい詩法を理解していたわけではない。ノベセンティスモと名乗りながらなおモデルニスモを脱せない者がいるかと思えば、はなはだしくは「ウルトラ」を標榜しながらいまだロマン主義の範疇に留まる者もいた³³⁾。時に、キュビズムではなく、ウイドブロが蔑視した未来派に傾倒しさえした。しかし、それでもウルトラリスモは、スペイン文学がヨーロッパ文学の最新の潮流に追いつくための踏段として必要なものであった。さらに1920年代に入ると、このグループに一時身を置いたホルヘ・ルイス・ボルヘスによってイスパノアメリカへも伝播する。ウイドブロが『北極の詩』によってスペイン語詩という畑に蒔いた前衛主義の種は、そのようにして着実に根を張り、長い歳月をかけて実りをもたらすのである。

29) Ibid., p. 26.

30) Ibid., p. 19.

31) Videla, Gloria, *El Ultraísmo: Estudios sobre movimientos poéticos de vanguardia en España*, Madrid, Gredos, 1963.

32) Brihuega, Jaime, *Las vanguardias artísticas en España. 1909-1936*, Madrid, Istmo, 1981, p. 208.

33) 坂田幸子、『ウルトラリスモ——マドリードの前衛文学運動』、東京、国書刊行会、2010年。pp. 42-62.